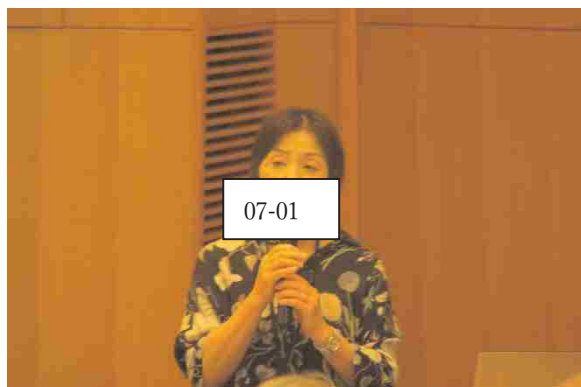


動物飼育体験活動と獣医師の支援

處 愛美 先生（公社）福岡県獣医師会理事／学校飼育動物専門委員会委員長）



- ・動物飼育校数の減少や小動物飼育校数の割合の低下により、実際に動物にふれる機会が減り、「命の大切さ」を実感できない子どもが増えている。
- ・地域により、獣医師会との連携による飼育相談や学校訪問等の実施に差が生じている。
- ・管理職や教員の動物飼育に関する専門的な知識（ふれあい方、生態、衛生面等）が不十分なため、教材として効果的に活用できない。

福岡県における獣医師会と県教育委員会との連携は、平成10年度の県獣医師会長と義務教育課長との覚書から始まりました。

[平成11年度～平成15年度]

モデル校（毎年12～13校）での飼育支援活動

[平成16年度]

「学校における望ましい動物飼育の在り方」に関する研修会

[平成17年度～24年度]

教員研修への講師派遣事業

希望校での飼育動物を使ったふれあい授業

飼育相談窓口の設置

義務教育課への活動報告

獣医師会員向け研修会の開催

現行学習指導要領の実施を機に今までの活動を見直しました。

成果

- ・子供たちに動物に対する愛情を育み、命の大切さを考える機会をつくることができた。
- ・管理職や教員に対する研修会の実施により、動物飼育が心の教育へつながる有効性について認識を深めることができた。
- ・獣医師会の活動内容を周知することにより、学校との協力関係の在り方を探ることができた。

課題

以上のことから平成25年度を準備期間とし、平成26年度から28年度までの3年間の事業が始まりました。県知事と県獣医師会長が正式に契約書を交わし、義務教育課が主幹する事業です。（今年度も要望が多く継続しています。）

1. 動物飼育相談体制の整備（電話相談・訪問指導）
 2. 飼育動物活用のための教員研修
 3. 動物飼育促進のための管理職研修
- を柱としていますが、2の教員研修は一通り県内の小学校は網羅したので、今年度は、1と3の事業を継続しています。（詳細は本誌19号を参照）

昨年度までの3年間の事業を通して義務教育課がまとめた成果と課題を紹介します。

成果

- ・専門的な知識を得たり、具体的な対処方法について学んだりすることができ、動物飼育の方法や衛生面に対する不安が軽減されたこと
- ・教科等の学習に飼育動物を活用することの有効性を実感し、各学校で報告・説明を行い、実践につなげることができたこと
- ・動物飼育に関する課題や獣医師との連携・協力のあり方について学ぶとともに、動物飼育を通じて児童の豊かな心が育まれることを

実感することができた

課題

- ・飼育動物を活用した授業の実施に当たっては、児童のアレルギー等の対応について周知していく必要があること
- ・飼育動物がない学校に対して、児童が動物と関わることのできる支援が必要であること

獣医師会の課題

- ・事業を継続していくための方策を考えること（獣医師に相談してよかったと評価してもらえること）
- ・獣医師が学校動物飼育支援を行うための制度を作ること

事業を継続していくためには、支援の内容の充実はもちろんですが、「学校獣医師制度」を確立することが獣医師会としての目標になると思います。このことについてはこれまでも（公社）日本獣医師会の学校動物飼育支援対策検討委員会等でも検討を重ねてきました。

法的には学校保健安全法を根拠に学校三師と同様に「学校獣医師」ができないかということも視野に入れて検討しましたがなかなか難しいというのが現状です。

個人的には、獣医師会が医師会とともに取り組んでいる「One Health」の理念の中で実現できるといいなと考えています。元々は人と動物の共通感染症や薬剤耐性菌問題等を考える中で提唱された理念ですが、地球上では、人口は増加し続けており、この地球に住む人間と動物の両者の生息環境に関する問題はますます複雑な社会的問題となっています。獣医師と医師が垣根を超えて関係を深め、協力しあうことはもちろん、公衆衛生と社会科学の専門家、野生生物学者と環境学者といったその他多くの関連職種において、より多くの予防策を展開し、全体としての備えと対応のためにはネットワークの構築が必要になります。そしてそれを支えるのは教育だと思います。学校という環境の中で、子供たちと飼育動物の健康を考え、未来社会において人と動物が幸せに暮らすことができるように

獣医師として関わることができたなら、学校動物飼育支援活動も、もっと広がりが出てくるのではないかと期待しています。

獣医師として思うこと

以上のような支援活動を行なってきましたが、動物を介することで普段は照れ臭くて言えないことが言えるような気がします。

獣医師は普段から動物と向き合い、命の脆さやしたたかさに、心くじけそうになったり、逆に励まされたりしながら日々を送っています。そして飼い主さんたちのひたむきさに叱咤され、勝手な行動に振り回されたりもしています。こんな私たちの願いは動物と子供たち、先生方が幸せであってほしいということです。

そのためにはまず動物のことやお世話の仕方についての正しい知識と方法を伝えたいと思っていますが、学校ではすぐに「獣医さんに聞いてみよう」とはならないのが現実です。もちろん、本で調べたりインターネットで検索したりすればそこら中に情報が転がっているのですから当然でしょう。しかし、私たちが伝えたいと思っているのは科学的な知識や技能だけでなく経験に基づいた「動物との向き合い方や命への思い」でもあります。

獣医師は教育者ではありませんが、新学習指導要領が育成を目指す資質・能力の三つの柱である「知識及び技能」、「思考力、判断力、表現力等」、「学びに向かう力、人間力等」は、まさに私たちが毎日苦闘しながら駆使しているもの（どんな仕事をしていても同じだとは思いますが）であり、子供たちの飼育体験と獣医師の経験がうまく融合して支援活動が広がることを願っています。

また、獣医療の世界は、なかなか答えが見つからないところでもあります。治療を巡って飼い主さん家族の考え方、獣医師の治療方針（これもいろいろあります）、それぞれの思いがあり、何が正解かは一概には言えない状況の中でみんなが悩みます。いろんな考え方を認めながら、より良い方策を探る・まさに「議論する道徳」のかなと思います。

【シンポジウム使用スライド】

飼育動物を活用した授業づくり

さわったり、だっこしたりしたいけどどうやったらいいのかな？



飼育動物を活用した授業づくり

獣医師の先生、教えてください！！

ウサギとのふれあいのしかたはね…。



飼育動物を活用した授業づくり

抱っこしたいな。でも、ちょっと怖いな。

こうやるんだよ！雄と雌はね…



飼育動物を活用した授業づくり

こわいときはね、タオルを使うといいよ。



ただ、子供たちに話をするとき、獣医師にとっても難しいことがあります。子供たちへの「発問」です。子供たちとやりとりする中で、彼らが「もっと知りたいな」、「面白そうだな」と思える発問やプレゼンテーションをやりたいと思うのですが、うまくできません。

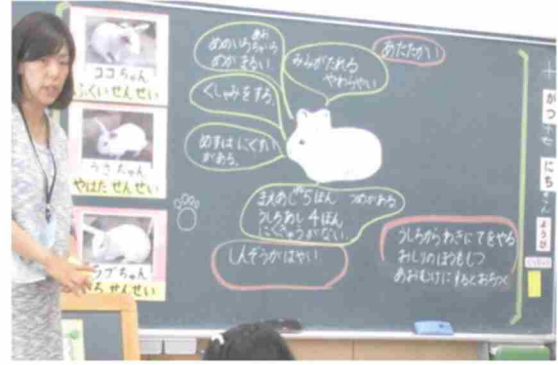
私は地元の市の教育委員でもありますので、先生方や指導主事の皆さんのお話を聞く機会も多いのですが、良い教師は「待つことができる」と言われます。とにかく喋りまくり、うんちくを披露している自分が嫌になってしまいます。個人的にはこれは大きな課題ですが、獣医師の多くは同じような悩みを持っているかもしれません。学校の先生方とともに指導案を検討し、獣医師の役割と授業の主眼を確認する必要性を感じています。獣医師に授業を丸投げにしないでほしいとも願っています。

「授業を丸投げにしないで」と言いつつ、欲張りな私は欲張りで生意気なことも考えています。私は、そこに立つだけで人生を感じさせる大人になりたいと思っています。子供たちの前に立ち、今日、胸の中にある喜びや悲しみ、苦しさや虚しさやいろいろな思いを直接的な言葉でなくても伝えられたらと思います。それは動物たちが精一杯生きる姿を私に見せてくれることで教えてくれたことでもあると思います。言葉ではない方法で動物たちが教えてくれたことを子供たちはどんな風に受けとめ心に刻み込むのだろう。そこに私がいることで少しでも動物と子供たちが「生きている」ことの素晴らしさを感じることができたらいいなと思っています。「動物飼育体験」で子供たちが素晴らしい宝物を受け取ることができますように、そして、未来の地球と動物と人類が健康で幸せであることを願ってやみません。

飼育動物を活用した授業づくり



飼育動物を活用した授業づくり



飼育動物を活用した授業づくり



抱っこできたよ。
むねとおしりをもつ
と、あばれないね。

ふわふわして
温かい。

飼育動物を活用した授業づくり



ぬいぐるみみたいだ
けど、みんなと同じ命
があって、生きている
んだよ。

飼育動物を活用した授業づくり



ウサギの心臓の音
聞こえる？

トクトクトクっ
て聞こえる。
はやい。

飼育動物を活用した授業づくり



もう一回だっこして、
気付きを確かめる

ぼくたちといっしょ。
生きているんだね。

飼育動物を活用した授業づくり



どんなことに気づき
ましたか？

飼育動物を活用した授業の実施率

